

「高齢者の性」に関する研究（１） “老いのイメージ”と“高齢者の性”のとりえ方

水 戸 美津子， 桑 原 洋 子
秋 山 啓 子， 島 村 澄 江， 渡 辺 典 子

A Study of Elderly sexuality (1)
“Elderly image” and “Elderly sexuality”

Mitsuko MITO, Youko KUWABARA
Keiko AKIYAMA, Sumie SIMAMURA, Noriko WATANABE

Summary The purpose of this study is to investigate general concepts about “Elderly image” and “Elderly sexuality”. 98 students in The University of The Air were selected as subjects. They were asked to write their concept about “Elderly image” and “Elderly sexuality” in free-style sentences. We classified them according to the method of KJ into some categories. Those categories were analyzed by using Hayashi’s quantification method Ⅲ. The following expressions were decided as general concepts about “Elderly image” and “Elderly sexuality”. For “Elderly image” are : ‘An individual difference is large’ ‘Weak and miserable’ ‘Bright and satisfactory’ ‘Physical weakness’. For “Elderly sexuality” are : ‘Unnecessary’ ‘activate’ ‘Hope for mental fulfillment’ ‘Have little knowledge nor interest’ ‘The bond of affection is important’.

要 約 本研究の目的は、一般の人の“古い”“高齢者の性”に対する考えを把握することである。対象は放送大学学生98名、自記式調査票を用いた。

択一回答項目である「古いに対するイメージ」は年齢別で違いがあり、若年者ほどステレオタイプな考えであった。自由記述式の「老人」「老人の性」に対するイメージはKJ法を用いてそれぞれ17カテゴリー、13カテゴリーに分類された。分類されたカテゴリーを基に、数量化Ⅲ類で分析した。その結果、「老人に対するイメージ」は“個人差が大きい存在”“弱々しく惨めな存在”“明るく充実した古い”“身体的に弱々しい”に、「老人の性に対するイメージ」は“老人に性なんてとんでもない、老人の性をタブー視する”“性は積極的に生きることに通じる”“精神的な充実を求める”“わからないし関心もない”“心の結びつきが大切”であった。この研究から“高齢者の性”に対しては、“古い”“性”の二重の偏見が反映されていることが示唆された。

key word : 高齢者の性, 老いのイメージ, 偏見
Elderly sexuality, Elderly image, Prejudice

I. 緒言

老年人口の増加に伴い臨床において高齢患者の占める割合が増え続けている。このため、医療・看護の場では高齢者に関する問題がたびたび検討されている。この中で高齢者ケアに関する問題として、公の場で議論されることの少ないものに“高齢者の性”にまつわる事柄がある²⁴⁾。“高齢者の性”が引き起こす事柄は臨床の場で様々な問題となるにもかかわらず、個人的な問題として扱われ臨床の場で検討されケアに生かされることは少ない²⁰⁾。このことは看護職が実際の看護場面で、「老人から性に対する悩みの相談を受けても、また老人に触れられたりすることに対しても、困惑したり、感情的に受けとめ否定的な態度や言動にでたりして、真剣にとらえられずに見過ごして、適切な看護が行われていない現状があるのではないだろうか」⁷⁾との指摘をうけることになる。しかし、“高齢者の性”に関する問題は臨床のカンファレンスなどで対応を検討する事柄にはなりにくいものである。

一方、看護基礎教育の中で“老い”や“性”に関するケアについて正課として取り上げられるようになったのは、平成2年のカリキュラム改正後である。また、最近日本の看護界で取り入れられ始めた「看護診断」^{14) 17)}の健康パターン類型の中にも「性一生殖パターン」が示されている。しかし、我々を含めて現役の看護職者らの多くは、看護基礎教育で「看護の基本となるもの」³⁵⁾は学んできたが、看護診断という概念や新カリキュラムにより“老い”や“性”について看護学の中に位置づけられた老人看護学や精神保健などを学んでいない。

しかしながらこれは、看護基礎教育だけに問題があるのではなく、宮内⁵⁾が指摘するように「人はあたかも性欲などないように振る舞い、人格は性欲と距離をおくほど尊敬される。性を語るほど人格から遠い人だと軽蔑される」という一般社会の“性”のとらえ方とも関連していると考えられる。我々看護職者も一般社会の“性”の影響を強く受けているのである。

では“高齢者の性”がどう位置づけられているのだろうか。石渡は²⁾、「今まで老人の性は、マイナーな部分に属する性のなかでも、さらにマイナーな部分に押し込められ、養老院、あるいは病院などの施設でのみこれからの大きな問題として認識されているにすぎなかった」としている。

このように“高齢者の性”に関しては、一般社会の“老人”に対する偏見と“性”に関する偏見という二

重の枠がはめられていると考えられる³⁷⁾。

最近になり、高齢者の性をタブーとするような視点からではなく、高齢者のQ.O.L.や生き甲斐等に積極的に位置づけようとする立場もみられるようになってきた。

東郷ら⁸⁾は“高齢者の性”を老後のトータルなQ.O.L.の一部をなす重要な要素として位置づけるべきだとの立場から、「むしろ、老後に残された数少ない歓びのうちの一つとして積極的にその問題に取り組むべきである」と述べている。

また、石渡³⁾はsexは一つの行為に過ぎないが、sexualityは人間存在そのものであるとの立場から、「性は、幸福を志向するものであり、幸福とは、まさに、精神活動の一つの知覚的発現状態にはかならない」と述べている。

さらに老人医療・看護の分野でも、「老人の生きがい」という視点から“性”をとらえようとの意見も見られるようになってきた^{9) 10) 13) 18) 34)}。これらの中には、高齢者の性に関する実態調査を行い、性生活が豊かなものほど生きがいと健康とが相互に影響しあっているという報告³⁴⁾もある。

そこで、本研究においては、“高齢者の性”に関して幅広く研究・調査し看護基礎教育に生かすことを目的とする。

本論文においては文献などで“高齢者の性”がどのようにとらえられているのかを概観し、さらに、一般の人が“老い”と“高齢者の性”についてどのように考えているのかについて把握することを目的とする。これは、ケアの提供者自身も日本の文化の中で生活し一般の性文化の影響を受けていると考えられ、そのため、はじめに一般的な状況を把握することは意義があると考えからである。

さらに今後は、看護職者及び看護基礎教育実践の状況などの領域から“高齢者の性”について検討する予定である。

なお、本研究において“性”という場合には大島^{28) 29)}や石渡らが指摘するように、sex, sexualityの2つの意味を含むものとする。sexとは性器にまつわる性行為などに関することであり、sexualityとは人格的・人間存在的認識概念である。このため意味を限定して用いる場合にはそれぞれsexとsexualityという言葉を使用する。

Ⅱ．方 法

Ⅱ－１．対象者と調査の手続き

放送大学の面接授業「脳の老化」を受講した者98名を対象に自記式調査表を用いて実施した。面接授業中に説明し調査表を配布，面接授業の最終日に回収した。調査にあたっては調査の意図を説明し承諾を得た。

Ⅱ－２．調査項目

調査項目は，基本属性，老いのイメージに関する事柄，老人の性及び失禁に関する事柄などである。老いのイメージに関する事柄は「老人の生活と意識－第3回国際比較調査結果報告書」³²⁾（総務庁長官官房老人対策室編）から項目を選定した。失禁に関する調査項目は「高齢者の医学医療に関する研究」³¹⁾（笹川医学医療研究財団，研究業績年報）を参考にした。老人の性に関しては自由記述式とした。

なお，本研究においては“老いのイメージに関する項目”として，択一回答項目である「老後の生活は何歳から始まるのか」「老後の生活としてイメージする事柄」「老後の役割としてイメージする事柄」の3項目と「老人に対するイメージ」の自由記述式で回答したものの合わせて4項目，“老人の性に関する項目”として「老人の性についてどう考えているのか」の自由記述式で回答したものを分析の対象として用いた。

Ⅱ－３．「老いのイメージ」に関する択一回答項目についての分析方法

老いのイメージに関する項目のうち「老後の生活は何歳から始まるのか」「老後の生活としてイメージする事柄」「老後の役割としてイメージする事柄」に関しては，それぞれ択一回答である。これら3項目の回答をそれぞれ5段階（20～24才，25～34才，35～44才，45～54才，55～64才）に層別しその割合を比較した。なお，この層別区分にあたってはD．レヴィンソン¹⁵⁾の成人期の発達段階及びB．S．ラウントリー¹¹⁾の家族生活周期を参考に分類した。

Ⅱ－４．「老人に対するイメージ」「老人の性についてどう考えているのか」自由記述式回答項目の分類

「老人に対するイメージ」の自由記述については，収集された197項目（1センテンスを1項目とした）について我々4名でKJ法を参考にして分類を行った。同様に「老人の性についてどう考えているのか」の自

由記述についても収集された112項目をKJ法を用いて分類した。

Ⅱ－５．自由記述の数量化の手続き

各対象者の自由記述（複数の記述がある）をⅡ－４．で得られたカテゴリーのどれに該当するのかを調べることによって，自由記述の名義尺度化が可能になる。この段階で数量化理論が適用できるという川間ら²⁵⁾の分析を参考にした。

なお，統計処理には，HALBAU (v.4)を用いた。

Ⅲ．結 果

Ⅲ－１．老後の生活について

“老いのイメージに関する項目”として，「老後の生活は何歳から始まるのか」「老後の生活としてイメージする事柄」「老後の役割としてイメージする事柄」の3項目について，調査者98名のうち無回答などを除き91名を分析の対象とした。その基本属性はTable 1.に示した。性別は男性12名(13.2%)，女性79名(86.8%)。年齢構成は20歳～24歳が8名(8.8%)，25歳～34歳が17名(18.7%)，35歳～44歳が14名(15.4%)，45歳～54歳が38名(41.8%)，55歳～64歳が14名(15.4%)であった。学歴は，高卒60名(65.9%)，

Table 1. 基本属性

a. 性別		b. 年齢構成	
男性	12	20～24歳	8
女性	79	25～34歳	17
計	91	35～44歳	14
		45～54歳	38
		55～64歳	14
		計	91

c. 学歴		d. 職業	
高校	60	有	37
短大	19	無	54
大学	12	計	91
計	91		

e. 同居形態		人数
配偶者のみ		15
配偶者と未婚の子供と		45
一人暮らし		8
その他		23
計		91

短大卒19名(20.9%), 大学卒12名(13.2%)であった。職業の有無では有職の者37名(40.7%), 無職の者54名(59.3%)であった。同居形態は配偶者との2人暮らし15名(16.5%), 配偶者と未婚の子供45名(49.5%), 一人暮らし8名(8.8%), その他の親族等との同居が23名(25.3%)であった。

「老後の生活は何歳から始まるか」について対象者全体では、50歳から：2名(2.2%), 55歳から：3名(3.3%), 60歳から：27名(29.7%), 65歳から：28名(30.8%), 70歳から：23名(25.3%), 75歳から：4名(4.4%), 80歳から：1名(1.1%), 90歳から：0, その他わからない：3名(3.3%)であり、65歳からが30.8%で最も多く、60歳・65歳・70歳から老後であると考えている者を合計した割合は全体の85.8%を占めていた。

調査対象者の年齢別 (Fig 1) では、20歳～34歳では65歳を老後の生活の始まりであるとする人が最も多く、35歳～44歳では70歳からが、45歳～64歳では60歳からを始まりとする人が最も多かった。しかし、Fig 1. からわかるように対象者の年齢が高くなるにつれてなだらかな線で広がりを見せており、老後の始まりについて幅をもって考えていることがわかる。

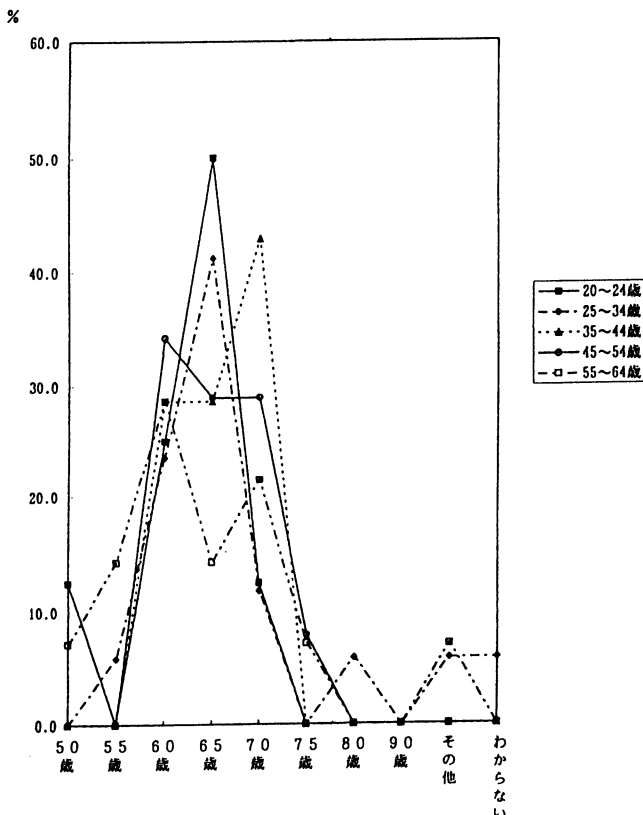


Fig 1. 老後の生活は何歳から始まるか

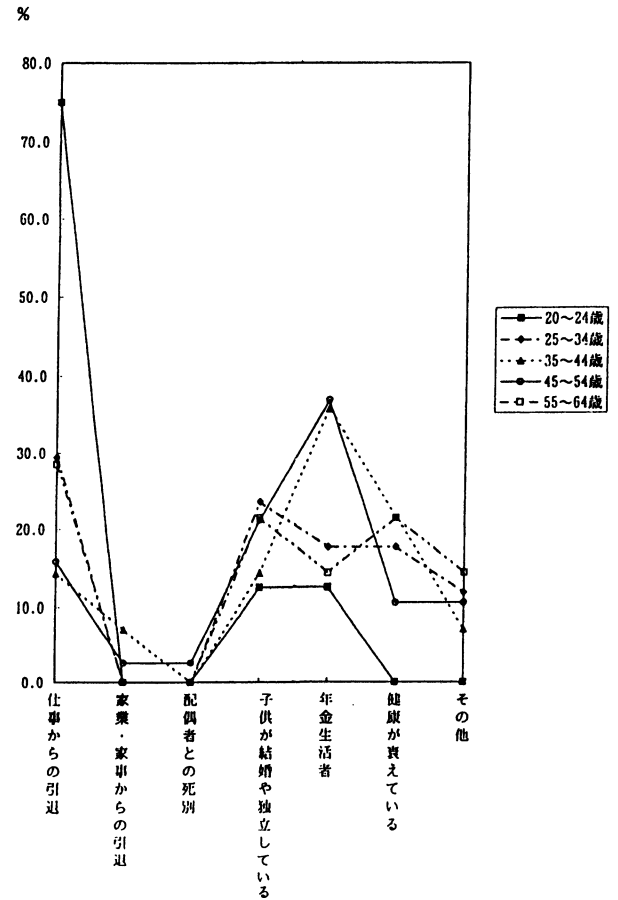


Fig 2. 老後の生活としてイメージする事柄

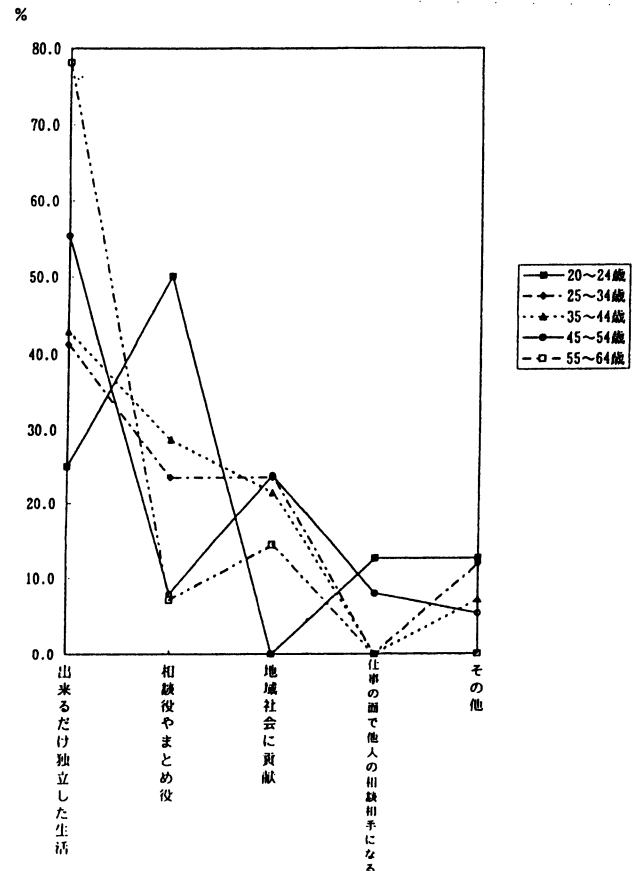


Fig 3. 老後の役割としてイメージする事柄

Table 2. 「老人に対するイメージ」の自由記述

KJ法によるカテゴリ分類と各項目カード（抜粋）一覧

明るく元気で力強い

- ・明るい
- ・元気
- ・力強い

精神面の成熟期

- ・年を重ねる毎に丸みを帯びてくる人
- ・思慮深い
- ・精神面の成熟期

趣味活動など充実した生活

- ・積極的に外とのつながりを持ち、仲間があって張りのある日々を過ごしている老人
- ・いきいきとした仕事や趣味の面で活躍し、人生を楽しんでいる
- ・いきいきとすてきに自分の生活をエンジョイしている

人生の先輩

- ・豊かな人生経験を生かしゆったりとした気持ちで人に接する事ができる人
- ・豊富な人生経験を持つ
- ・人生の先輩

かわいい存在

- ・かわいい

身体機能の衰え

- ・皮膚にシミができ、皮膚が黒ずむ
- ・動作がのろい
- ・健康を害し、自分の身の回りのことができなくなる

精神・心理機能の衰え

- ・同じ話を何度もする
- ・ぼけている
- ・新しい環境に不適應となりやすい

病気がちな存在

- ・寝たきりになることが多い
- ・すぐ病院へ行く
- ・病気が重症化しやすい

援助を必要とする存在

- ・社会福祉に頼りがちな弱い人
- ・一人では生活できない年齢
- ・生活に第三者の援助を必要とするもの

死がイメージされる存在

- ・死が身近にある人
- ・先がない
- ・自然の摂理に基づいて、終焉を迎えようとしている人

頑固な存在

- ・頑固
- ・自己中心的
- ・もう変りようのない人、他人の意見を取り入れようとしていない人
- ・心の柔軟性の喪失

悲観的で暗いイメージ

- ・生活を切り詰め、明日を迎える喜びがないような人
- ・暗い
- ・生きていこうという意欲がなくなった方

惨めなイメージ

- ・多額のお金を持っても不足しているような気持ちで暮らしている
- ・何事も子どもたちにたよる老後は惨しい
- ・みじめ

だらしがなく不潔

- ・だらしが無い
- ・汚い
- ・不潔

孤独な寂しい存在

- ・孤立した存在
- ・精神的な寂しさを抱えている人
- ・どちらかの配偶者を欠き、一人の世界に生きている人

今後の自分の老い方を考えさせられる存在

- ・自分自身の今後
- ・これからの自分の姿
- ・どうしたら楽しく、美しく老人になっていけるのか

個人差が大きい存在

- ・それぞれが生きてきた人生の質、多様性を持っている興味深い対象
- ・元気ではつらつとした老人は、「老人」とは違ったイメージを持つ
- ・個人差が大きく、元気な人も、老いこんで見える人もいる

Table 3. 「老人に対するイメージ」の自由記述

数量化Ⅲ類の分析結果

KJ法によるカテゴリー	人数	I 軸	Ⅱ 軸	Ⅲ 軸	Ⅳ 軸	V 軸
明るく元気で力強い	6	-0.232	0.359	3.967	-0.398	1.304
精神面の成熟期	10	-0.227	-0.720	-0.101	0.346	-1.535
趣味活動など充実した生活	16	-0.238	0.216	1.182	-0.270	0.424
人生の先輩	19	-0.079	-0.723	0.262	0.090	-0.518
かわいい存在	2	-0.276	0.413	-0.341	-0.947	-0.560
身体機能の衰え	20	-0.272	0.297	-0.762	0.049	-0.393
精神・心理機能の衰え	11	-0.242	0.144	-0.426	0.140	-0.881
病気がちな存在	11	-0.028	0.196	0.205	0.643	0.357
援助を必要とする存在	9	-0.242	0.692	-1.086	3.010	2.317
死がイメージされる存在	4	-0.234	0.300	0.571	-0.510	0.478
頑固な存在	22	-0.123	0.034	0.364	0.320	-0.532
悲観的で暗いイメージ	9	-0.314	0.818	-1.057	-1.912	1.466
惨めなイメージ	6	-0.311	0.746	-1.246	-2.476	0.654
だらしがなく不潔	7	-0.234	0.138	-0.163	0.654	-1.913
孤独な寂しい存在	12	-0.288	0.542	-0.564	-0.568	0.056
今後の自分の老い方を考えさせられる存在	4	-0.193	-5.827	-0.786	-0.618	1.977
個人差が大きい存在	7	4.853	0.119	-0.122	-0.144	0.082
寄与率		12.028	10.049	8.768	8.521	7.950
累積寄与率		12.028	22.077	30.845	39.366	47.317

「老後の生活としてイメージする事柄」について対象者全体では“年金生活者”25名(27.5%)，“仕事からの引退”23名(25.3%)，“子供が結婚や独立をしている”18名(19.8%)，“健康が衰えている”13名(14.5%)，“家業家事からの引退”2名(2.2%)，“配偶者との死別”1名(1.1%)の順となっていた。調査対象者の年齢別(Fig 2)では、20～34歳及び55～64歳では、“仕事からの引退”をイメージする人が最も多く、35～44歳及び45～54歳では“年金生活者”をイメージする者の割合が高かった。

同様に「老後の役割としてイメージする事柄」について、対象者全体では、“できるだけ独立した生活”47名(51.6%)，“地域社会に貢献する”18名(19.8%)，“相談役やまとめ役”16名(17.6%)，“仕事の面で他人の相談相手になる”4名(4.4%)の順となっていた。これを調査対象者の年齢別(Fig 3)でみると20歳～24歳では“相談役やまとめ役”というのが最も多く4名(50%)であったが、その他の年齢層では、“できるだけ独立した生活”が圧倒的に多くなっていた。

Ⅲ-2. 老人に対するイメージ

「老人に対するイメージ」については、自由記述の

あった男性9名、女性73名を対象とした。年齢構成は、20～24歳8名、25～34歳15名、35～44歳13名、45～54歳34名、55～64歳12名であった。

KJ法により「老人に対するイメージ」は、“明るく元気で力強い”“精神面の成熟期”“趣味活動など充実した生活”“人生の先輩”“かわいい存在”“身体機能の衰え”“精神・心理機能の衰え”“病気がちな存在”“援助を必要とする存在”“死がイメージされる存在”“頑固な存在”“悲観的で暗いイメージ”“惨めなイメージ”“だらしがなく不潔”“孤独な寂しい存在”“今後の自分の老い方を考えさせられる存在”“個人差が大きい存在”の17カテゴリーに分類された。Table 2.に「老人に対するイメージ」の自由記述-KJ法によるカテゴリー分類と各項目カード(抜粋)を示した。

次にKJ法によって分類したカテゴリー毎に対応した記述がある場合、ない場合で1, 0を与え自由記述による17カテゴリーで数量化Ⅲ類による分析を行い、第V軸まで抽出した。寄与率は第I軸12.028%, 第II軸10.049%, 第III軸8.768%, 第IV軸8.521%, 第V軸7.95%であり、累積寄与率は47.317%とやや低い結果であった。Table 3.に軸毎のカテゴリー数量を示した。

Table 4. 「老人の性についてどう考えているのか」の自由記述

KJ法によるカテゴリ分類と各項目カード（抜粋）一覧

将来の自分の望ましい性の姿

- ・年老いたら手をつなぐだけで幸せという関係を作りたい
- ・老後はお互いにいたわり合いながら、性生活がすこしある夫婦でいたい
- ・老人になっても性生活は大切、身体の一部でもふれあうことが大切

性は生きることに通じる

- ・性は生に通ずると思っている
- ・性は人間にとって根源的なもの
- ・故障が無い為か能力はある、性は人生の潤いに切っても切れない重要な関係

心の結びつきが大切

- ・性はセックスだけをいうのではなく、思いやり、愛情のコミュニケーション、肌のぬくもり等の精神的な面が大切
- ・心の結びつきが大切
- ・コミュニケーションの一つの方法

自然体（ありのまま）がよい

- ・夫婦で自然であればよい
- ・性生活について悩んだことはない、自然にまかせることが一番
- ・老人だからといって我慢するべきではなく自然でよい

いつまでも‘女性’でありたい

- ・いくつになってもすてきな異性をみたら心がときめくようでいたい
- ・できれば長い間‘女’として生きていたい
- ・‘女性’としていつまでも美しくそれなりにしていきたい

老人になっても性生活はあった方がよい

- ・老人になっても性生活があって良い
- ・年齢など気にせず欲求があればできるだけ満たすべき
- ・生きている人間ならば正常な機能が働いている限りあって当然

老人の性に偏見を持つべきではない

- ・老人だからといって性欲を否定することはない
- ・人間として当然のことと考え、特に老人だからこうあるべきとは考えない
- ・性生活は非常に個人差があるもの、よって年齢による偏見は持つべきではない

現在の性生活

- ・63才、週一回くらいの割で、猛烈な欲望に悩まされ男の性に驚く
- ・現在性生活はないが気にしていない
- ・主人とのセックスはほとんどないが身体をぶつけたり、肩をもんだりすることでコミュニケーションをしている

機能の減退

- ・性欲はあるが体が衰えてきている
- ・年毎に性欲は減退する
- ・男性は立たないからできない

精神的に充実していれば性生活はなくてもよい

- ・夫とは最近性生活はないが、定年退職後話し合う時間が多くなったので不満はない
- ・伴侶に先立たれた場合には、趣味やボランティアなど自分の好きなことをしていきたい
- ・性生活はなくとも精神的に安定していればよいのでは

現在の自分の否定的な性生活

- ・性生活はなくても平気、本当に面倒くさい
- ・老いても性生活が必要な？もういいわというのが本音です
- ・現在でも性生活は面倒と思っているので老人になってまでと思うと気が重い

とんでもない

- ・82才の男性が、男性は死ぬまで性欲があると話され「いやらしい」と思った
- ・なんで男はいつまでたっても欲があるのか不思議
- ・何か生臭い感じがして不潔な感じがする

わからないし興味がない

- ・正直、考えたことはない
- ・まだ分らない
- ・老人と性について考えたことがない

Table 5. 「老人の性についてどう考えているのか」の自由記述

数量化Ⅲ類の分析結果

KJ法によるカテゴリー	人数	I 軸	II 軸	III 軸	IV 軸	V 軸
将来の自分の望ましい性の姿	6	0.301	-0.151	0.653	0.075	-0.015
性は生きることに通じる	10	-0.300	3.634	-1.234	0.441	-0.272
心の結びつきが大切	16	-1.824	-0.740	-0.921	-0.091	3.615
自然体（ありのまま）がよい	19	-1.762	-0.926	-0.863	-0.803	-1.925
いつまでも‘女性’でありたい	2	0.176	0.083	1.311	0.374	-0.035
老人になっても性生活はあったほうがよい	20	-0.474	0.157	0.026	0.581	0.380
老人の性に偏見を持つべきではない	11	-0.882	-0.295	0.144	-0.089	-0.221
現在の性生活	11	0.272	0.808	0.232	-0.848	-0.067
機能減退	9	0.081	-0.159	0.079	0.028	-0.391
精神的に充実していれば性生活はなくてもよい	4	-0.252	-0.058	2.613	2.007	-0.297
現在の自分の否定的な性生活	22	0.894	-0.083	0.595	-1.096	0.162
とんでもない	9	1.396	0.043	0.135	-2.534	0.511
わからないし興味がない	6	1.553	-0.901	-1.609	1.253	-0.162
寄与率		11.283	10.855	10.353	9.932	9.359
累積寄与率		11.283	22.138	32.491	42.423	51.782

第Ⅰ軸は，“個人差が大きい存在”のカテゴリーが正の値をとり、それ以外のカテゴリーはすべて負の値をとっていることから「個人差が大きい」に関連した軸と考えられる。第Ⅱ軸は，“悲観的で暗い存在”“惨めなイメージ”“援助を必要とする存在”“孤独な寂しい存在”が正の値をとり，“今後の自分の老い方を考えさせられる存在”“人生の先輩”“精神面の成熟期”のカテゴリーが負の値をとることから「弱々しく惨めなイメージ」に関連する軸と考えられる。第Ⅲ軸は，“明るく元気で力強い”“趣味活動など充実した生活”が正の値をとり，“惨めなイメージ”“援助を必要とする存在”“悲観的で暗い存在”が負の値をとることから「明るい充実した老い」に関連した軸と考えられる。第Ⅳ軸は，“援助を必要とする存在”“だらしがなく不潔”“病気がちな存在”のカテゴリーが正の値をとり，“惨めなイメージ”“悲観的で暗い存在”のカテゴリーが負の値をとっていることから「身体的に弱々しい」存在に関連した軸といえる。第Ⅴ軸は，寄与率が低く各カテゴリーの値も不定であるため分析から除外した。

Ⅲ－３．「老人の性」に対するイメージ

ここでは，「老人の性についてどう考えているのか」について自由記述のあった男性6名，女性66名を分析の対象とした。年齢構成は，20～24歳5名，25～34歳9名，35～44歳16名，45～54歳31名，55～64歳11名で

あった。

「老人に対するイメージ」の自由記述と同様にKJ法により，“将来の自分の望ましい性の姿”“性は生きることに通じる”“心の結びつきが大切”“自然体（ありのまま）がよい”“いつまでも‘女性’でありたい”“老人になっても性生活はあったほうがよい”“老人の性に偏見を持つべきではない”“現在の性生活”“機能の減退”“精神的に充実していれば性生活はなくてもよい”“現在の自分の否定的な性生活”“とんでもない”“わからないし興味がない”の13カテゴリーに分類された。Table 4.に「老人の性についてどう考えているのか」の自由記述－KJ法によるカテゴリー分類と各項目カード（抜粋）の一覧を示した。

この13カテゴリーで数量化Ⅲ類による分析を行い，第Ⅴ軸まで抽出した。寄与率は第Ⅰ軸11.283%，第Ⅱ軸10.855%，第Ⅲ軸10.353%，第Ⅳ軸9.932%，第Ⅴ軸9.359%であり，累積寄与率は51.782%であった。Table 5.に軸毎のカテゴリー数量を示した。

第Ⅰ軸は，“わからないし興味がない”“とんでもない”“現在の自分の否定的な性生活”といったどちらかというと否定的なカテゴリーが正の値を示し，“心の結びつきが大切”“自然体でよい”“老人の性に対して偏見をもつべきでない”“老人になっても性生活はあったほうがよい”“性は生きることに通じる”といった肯定的なカテゴリーがそれぞれ負の値をとっている。このことから第Ⅰ軸は，「老人に性なん

てとんでもないといった老人の性をタブー視する」ことに関連した軸と考えられる。第Ⅱ軸は“性は生きることに通じる”“現在の性生活”“老人になっても性生活はあったほうがよい”の категорияが正の値をとっており、特に“性は生きることに通じる”が大きな正の値をとっていることから「性は積極的に生きることに通じる」ということに関連した軸と考えられる。第Ⅲ軸は“精神的に充実していれば性生活はなくてもよい”“いつまでも‘女性’でありたい”が正の値をとり、“わからないし興味がない”“性は生きることに通じる”“心の結びつきが大切”“自然体でよい”の категорияが負の値をとっていることから、「精神的な充実を求める」ことに関連した軸だと考えられる。第Ⅳ軸は“精神的に充実していれば性生活はなくてもよい”“わからないし興味がない”が正の値をとり、“とんでもない”と“現在の自分の否定的な性生活”が負の値をとっていることから「わからないし関心もないといった肯定でも否定でもない」ということに関連した軸と考えられる。第Ⅴ軸は“心の結びつきが大切”が正の値をとり、“自然体がよい”“機能減退”が負の値をとり、「心の結びつき」ということに関連した軸と考えられる。

Ⅳ．考 察

Ⅳ－１．「老い」に対するイメージと偏見

我々は高齢者の性に関しては、一般社会において“老人・老い”に対する偏見と“性”に関する偏見という二重の枠の中でとらえられていると考えた。これは「性への関心や欲望の度合いが強いと好色な老人であるとか、異常な老人であるとかいわれ、非難の対象となる。もちろん、その背景には、老人になると性への関心は若年に比べて低下するのが自然の摂理であり、人間の生き方として性以外のことに関心を示すところこそが知恵というものであるという観念、倫理がある」⁴⁾ということに関連している。

Fig 1.2.3. から、本調査対象者は老後の始まりとして、85%以上の者が“60・65・70歳から”と考えていること、老後の生活として“年金生活者及び仕事からの引退”をイメージしており、それが全体の50%以上をしめていることがわかった。また、老後は“できるだけ独立した生活”をすることを役割と考えている結果となった。いずれの項目にも年齢別にみると違いがみられる。しかし、調査対象が少ないため明らかに差として考えられるかどうかは不明である。この検討は

今後の課題である。ただ、印象としては若年者ほど“老後の生活は65歳から始まり、老後の生活は仕事からの引退であり、老後の役割は相談役やまとめ役である”といったかなりステレオタイプの考えているようである。これは、老年期まで間があり実感がわかない結果と考えられる。

以上の3項目から浮かびあがるイメージは、社会的な職業生活から引退し、経済的には年金でほどほどに暮らし、できるだけ子供などにたよらず独立した生活をするというものである。これは、自分の老後についての希望的イメージのようにも考えられる。

一方、自由記述による老人に対するイメージはKJ法を用い17カテゴリーに分類された。プラスイメージと考えられる“明るく元気で力強い”“精神面の成熟期”“趣味活動など充実した生活”“人生の先輩”“かわいい存在”の5カテゴリーが延べ人数で53名である。マイナスイメージとして考えられる“身体機能の衰え”“精神・心理機能の衰え”“病気がちな存在”“援助を必要とする存在”“死がイメージされる存在”“頑固な存在”“悲観的で暗いイメージ”“惨めなイメージ”“だらしがなく不潔”“孤独なさびしい存在”は10カテゴリーで延べ人数101名である。どちらでもないと考えられる“今後の自分の老い方を考えさせられる存在”“個人差が大きい存在”という2カテゴリーは延べ11名であった。カテゴリー数延べ人数共にマイナスイメージが多く、特に“頑固”“孤独な寂しい存在”という記述のあるものが、それぞれ22名、12名と多かった。

また、数量化Ⅲ類で5軸まで求めたが累積寄与率が低く4軸までの解釈にとどめた。それぞれの軸は「個人差が大きい存在」「弱々しく惨めなイメージ」「明るい充実した老い」「身体的に弱々しい」に関連した軸と考えられ、明るい充実した老いをイメージする一方で、身体的に弱々しく心理・社会的にも弱く惨めな存在であるという現代の老人観を反映していると考えられる。

Ⅳ－２．一般社会における老人観の側面としての 高齢者の sexuality

“高齢者の性”をどうとらえるかは、高齢者を人格を持った人間としてどうみるかに関連すると考える。前述したように、性への関心や欲望の度合いが強いと“老人なのにいやらしい”といった認識を受けやすい。これは性にまつわる事柄は若年者の問題であり、老年

者はそんなことはないという考え方の反映であると考えられる。

松下⁴⁾は、老人の性が何を象徴しているのかについて述べ、以下の7つをあげている。①ごく単純に老人になっても性の快楽を味わい得ることの誇示、②性機能の衰退を表現することによって、老いの惨めさや人生のはかなさを示す、③男性の肉体的、精神的な愛情の持続を性という行為によって示す、④男女の愛情の枯渇を性という行為によって示す、⑤人間としてのふれあい、つながり、結びつきを表すための性、⑥その人の人生観の現れとしての性、⑦病や死に直面したときの、生きることへの証として、あるいは生命とのかかわりとしてのシンボルである。これらを我々「高齢者の性」の結果と比較してみると、高齢者の性に肯定的であると考えられるそれぞれのカテゴリーは松下の述べる7つのいずれかに対応した結果となった。

しかし、これらの肯定的イメージのものは問題はないが、KJ法で分類された“とんでもない”のカテゴリーの中のそれぞれのカードのように考える風潮は、現実には様々に具体的偏見となって具現化されている。

その象徴的なものの一つが日本の老人ホームであるとして、宮内⁶⁾は次のように述べている。「日本の老人ホームの形態は、過去救貧施設の観念を今に引きずっているかに思われる。今もって生活の場は4人共同の部屋なのである。そこには、プライバシーの確保はありえない。老人の生活にはプライバシーは必要ないといわんばかりではないか。仮に寝たきりになると、ボケようとプライバシーがないということは尊厳ある人間として扱われていないことになる」さらに、「根本的には、日本人の心の奥に横たわる個人軽視の思想が問題なのである。特に、老人の生活についての軽視である。だから、老人ホームの老人のQ.O.L.の向上といっても限度があるのだ。プライバシーがないのだから性におけるQ.O.L.は全くといっていいくらいない」と鋭い指摘をしている。このように、老年期における「性」についての誤った考え方や、性は若い世代のものであり、老人の性行動は好ましくないものとする考え方が様々な場に影響を与えている。

しかし、老人の性生活が豊かなものほど生き甲斐も健康度も高いことがわかり、性生活と生き甲斐と健康とが相互に影響しあっていることを確認した、という報告からもわかるように、高齢者の性に対し意識の変革が迫られているのではないだろうか。

Ⅳ-3. 専門職としての看護職者に求められるもの

今回は臨床の場で問題となっていることについては調査していないが、我々は文献等を通し「誤った常識」を正すべき立場にあるはずの我々を含めた医療・福祉従事者においてすら、十分な知識と認識をもっているとは言い難いことを再認識した。

専門職者として相手の性を身体面でのみとらえるのではなく、精神面・社会面をも含めたsexualityとしてとらえる必要があることがわかった。さらに我々自身のsexualityについての考えを深めることにより、性の問題をもつ患者によりよい援助が提供できるように自ら啓発していかなければならないと考えている。

広井¹⁾の次のような指摘は重要である。「性の問題は社会的規範から大きく逸脱しない限り、男女間の極めて個人的な問題である。たとえば、老人ホームで比較的健康な老人男女が仲良くなることから性行為にいたることも、ある程度当然の帰結ともいえる。果たしてそのような配偶者を喪った老人同志の男女関係に、医療看護側がどこまで介入しうるのであろうか」

この問題を深めていくのは今後の課題である。なお、本研究の調査対象者は、ある限定された数少ないケースであるため一般の人の考えとして普遍化するには限界があると思われるが、文献等とも合わせ一般の人の考えのある側面は反映していると考ええる。

V. 結 語

本研究を通して、高齢者にとっても性的活動は若い人と同様に重要な生活の一部であることが再認識された。また、性にまつわる事柄は高齢者だけの事柄ではないが、高齢者の場合には“老人”ということが加わり、性に対して二重の偏見でみられていることが示唆された。今後、人口構成の高齢化が進むなかで、「高齢者の性」の問題は医療面でも大きな課題となるものと考えられる。さらに検討されケアに生かされていくべき分野と考えられる。

〈引用文献〉

- 1) 広井正彦(1991): 老人と性, EXPERT NURSE, 7-15, P20.
- 2) 石渡利康(1987): 性権と人間存在, 高文堂出版, P12.
- 3) 石渡利康(1987): 前掲書, P47.
- 4) 松下正明(1993): 表出としての老人の性, 老年精神医学雑誌, 4-12, P1372~1374.
- 5) 宮内博一(1994): 老いの生と性, 海竜社, P59.
- 6) 宮内博一(1994): 前掲書, P17-19.

- 7) 水谷日登美(1988): 老人の性に対する看護婦の意識調査, 日本看護学会集 看護教育, 19, P145.
- 8) 東郷伸一, 川平和美(1991): Sexuality, 総合リハビリテーション, 19-4, P339.

〈参考文献〉

- 9) 阿部初江(1981): たまゆらの, 日本看護協会出版会.
- 10) 青木孝允(1985): 老人と性, 現代医学, 33-1, 47~50.
- 11) B. S. ラウントリー(1986): 家族心理学, 有斐閣双書.
- 12) 大工原秀子(1979): 老年期の性, ミネルヴァ書房.
- 13) 大工原秀子(1985): 老人の“性”をめぐる, 月刊ナーシング, 5-2, 26-36.
- 14) ダイアンK, ニューマン(1995): 看護診断にもとづく高齢者看護ケアプラン, 医学書院.
- 15) D. レヴィンソン(1980): 人生の四季, 講談社.
- 16) 波田野完治(1993): 吾れ老ゆ故に吾れ在り, 光文社.
- 17) Jynda Juall Carpenito (1991): 看護診断ハンドブック, 医学書院.
- 18) 金子和子(1985): “全人的医療”の視点からするアプローチを, 5-2, 100-106.
- 19) 木村宏子(1983): 看護婦による性指導はどこまでできるか, 看護展望, 8-9, 22-28.
- 20) 木村宏子(1985): 看護の中の“性”, 月刊ナーシング, 5-2, 19-24.
- 21) 児島良子, 小河信子(1989): 看護学生の“老人の性”に関するイメージと教育の効果, 日本看護学会集 看護教育, 20, 63~66.
- 22) 河野友信(1985): “性”と臨床; その現状と今後の課題, 月刊ナーシング, 5-2, 163-171.
- 23) 工藤祝子(1993): 入院患者のセクシャリティと看護, 日本看護学会誌, 24, 67-69.
- 24) 川野雅資(1990): 患者の性を考えるときに考慮しておきたいこと, 看護, 42-9, 57-64.
- 25) 川間健之助(1993): 中途障害者の障害受容と友人関係ー自由記述の数量化による検討, 筑波大学リハビリテーション研究, 2-1, 29-34.
- 26) 中村真祐美(1983): 性への援助と性的羞恥心, 看護展望, 8-9, 14-21.
- 27) 難波紘二(1991): 歴史の中の性, 溪水社.
- 28) 大島清(1995): 性紀末, 毎日新聞社.
- 29) 大島清(1990): 老いを「脳」で定義する, 情報センター出版局.
- 30) 押山トシ子(1985): 老人の性に関する保健婦及び保健婦学生の意識調査, 保健婦雑誌, 41-3, 59-69.
- 31) 笹川医学医療研究財団(1991): 高齢者の医学医療に関する研究, 研究業績年報, 7-1.
- 32) 総務庁長官官房老人対策室編(1992): 老人の生活と意識, 第3回国際比較調査結果報告書.
- 33) 角藤通子(1983): 保健婦による性の指導・相談, 看護展望, 8-9, 29-34.
- 34) 内野英幸, 能勢隆之(1994): 老人の性に対する公衆衛生的なアプローチ, 日本公衛誌, 41-3, 262~267.
- 35) ヴァージニア・ヘンダーソン(1972): 看護の基本となるもの, 日本看護協会出版会
- 36) 吉瀬由美(1994): 患者の性問題への取り組み方と看護婦の性意識との関係, 日本看護学会誌看護総合, 25, 95-97.
- 37) 吉沢 勲(1986): 老人と性的問題, 臨床精神医学, 15-11, 1779~1783.
- 38) 吉沢 勲(1991): 老人福祉の立場から見た高齢者の性, IMPOTENCE, 6-2, 130~132.